
ロージとジゴロの機械屋事件簿

川村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロージイとジゴロの機械屋事件簿

【Nコード】

N7435D

【作者名】

川村

【あらすじ】

ドアを開けるとそこは…？/機械好きな青年屋久島鉄之助こと通称ロージイがある夜呼び出された場所はクレーンのでっぺんだった！海に落ちたロージイを助けた女。頼みごとを残して文字通り姿を消した女に興味を引かれたロージイは、その頼みごとを通じてもう一度その女に会おうとするが…。

薄暗い部屋に赤い光が明滅した。緊急を告げる警報に屋久島鉄之助は顔をしかめた。

そこは部屋というより工場や基地といった方が適切かもしれない。床には子供の腕ほどもある太さのコードが何本も這いずり回り、鉄骨がむき出している天井からは、銅線、裸電球、各種スイッチ、ガラス管、変わったところで台所用品や洗濯物までもが垂れ下がっていた。細いパイプが壁を走り、幾つもの蓋つきメータが不揃いに顔をつき出す。空調用のモーターが回転する音がごおごと低音で響いていた。足の踏み場もないほどの機械の山を、鉄之助は器用によけながら進んでいく。

壁の隅にあるドアには幾つかの計器に混じって小さな回転灯が取り付けられていた。しかし確かに光ったはずのライトは、鉄之助がドアの前についた時にはただ沈黙を保っている。不思議そうにコードの接続を確認した鉄之助は一つ首をかしげたあと、ひょいとドアを開けた。

「おわっ、おわあああああ！！！！！」

鉄之助がドアを閉めた瞬間、彼の眼下には360度のパノラマで夜景が広がっていた。色とりどりの光がまるで花びらのように闇に浮かんでいる。遥か低いところで。

彼はちらと後ろを確認したが、いつもどおり既にドアは消えていた。代わりに視界に入ったのは、太い鉄骨が精緻に組み上げられている、横一列の巨大なクレーンだ。高さは30mほどもあるだろうか。もし彼が空の上からこの景色を眺める事ができたなら、自分が今横一列に並んでいるガントリークレーンの一番端のひとつに立っていることが分かっただろう。

鉄之助の耳元で風がびゅうとうなった。煽られた体がぐらぐら揺れる。クレーンの半ばに設置されている操縦室はおるか、数メートル先の点検用階段までですらたどり着ける気がしない。一際強い風が吹きつけ、あ、と思ったときには遅かった。鉄之助はあっけなくバランスを崩した。

移動する光。動かない光。白い、赤い、蒼い、黄色い、色鮮やかな光の群れ。そんなものがスローモーションで彼の視界をよぎっていく。

そしてきつちり3秒後、クレーンの真下で大きな水しぶきがあがった。

「あー……。死ぬかと思った……」

鉄之助は近くのコンクリートに取り付けられている梯子にたどり着いて、一息ついた。まだ体の半分は水の中だが、とりあえず命の危険は去った。暗く視界がきかないもののどうやらここは港らしいと当たりをつける。この規模のクレーンが連続して並んでいる場所というのは限られている。

服は水を吸い上げ重く身体にまとわりつく。鉄之助は力を入れて体を引き上げ、倒れこむようにして地上へよじ登った。荒い息をつきながら仰向けのまま周囲を確認する。

当りをつけたとおり、そこは港だった。先ほどは気付かなかったが、並んでいる巨大なクレーンの一つに小型のタンカーがつかねがれている。沿岸はコンクリートで固められている。コンテナクレーンがある区域はフェンスで区切られ、鉄之助が上りついた場所はその先の小さな公園だった。

それにしても、と鉄之助は考えた。すぐ岸に上がったということとは、これは一歩間違えたら、いわゆる「赤いトマト」だったのでないだろうか。タンカーが横付けできるほどの深さがありながら、すぐ近くに岸があるというのも港の特徴だ。地上までこれだけの距

離があると、風向きひとつで落下地点は変化する。落ちる場所は海かコンクリートかの二択だったわけで、これは運がよかったといえるのかと鉄之助は考えた。視界の端に映る、頭を下げたガントリークレーンを横目で確認する。

思い出したようにくしゃみが一つ飛び出す。鉄之助は鼻をすすりながら、澄んだ夜空を眺めてため息をついた。

「あの、大丈夫ですか？」

そのとき唐突に声をかけられ、鉄之助は驚いて顔を上げた。女の声だ。

「すごい音がしたから、見にきたんですけど、もしかして、ここから落ちたんですか？」

若い女が心配そうに鉄之助を覗きこんでいた。まだ女の子といってもいい。辺りが暗いので定かではないが、かなり可愛いと評して差し支えなさそうだ。鉄之助は慌てて起き上がると、首を振って水気を払った。

「や、落ちたのは落ちただけど、ここからじゃねえんだけど…まあいいや」

後半はお茶を濁して、思い出して付け足す。

「えっと、今何時？」

「時間ですか？」女は腕時計を確認した。文字盤の蛍光塗料が暗闇に淡く浮かんでいる。「今は、8時半ですね」

「あ、もうそんな時間なんだ。穴蔵に籠ってつと時間の感覚がなくていけねえや」

「あなぐら？」

「あ、いや、それもこつちの話だった。えーと、俺は大丈夫。なんとかね。ところで、ここ、どこかわかる？」

「ここは東京の浮島ですよ。埠頭ですね」

鉄之助の頭の中にぼんやりとした日本地図が浮かぶ。鉄之助の小汚い部屋、通称穴蔵は都内の東側だった。

「なるほどー。あんま離れてなくてよかったわ。やっぱり不用意に開けちゃいけないな、あれは」

一人頷く鉄之助を見て、女は首をかしげた。小さく笑って大丈夫そうですねと言った後、持っていたバッグから魔法瓶を取り出す。

「寒くないですか？ よかったら飲んでください。コーヒーです」

「ありがてえ」

鉄之助はかたかた鳴る歯を噛み締めた。さつきから震えが止まらない。

「いや、本当助かる。あんた、名前は？」

鉄之助は湯気を放つカップを受け取りながら聞いた。水で濡れている地面を避けて腰を下ろすと、すぐ近くに女も座った。コーヒーの香りがふんわりと漂い、飲みくだすと腹に温もりを感じた。真冬の寒中水泳はこたえる。

「あたしは、シヨウコです」

あらためて女をしげしげと眺めていた鉄之助は、女の目を見た瞬間ぎくりと身体を固めた。真っ赤だった。目のふちと鼻も赤い。今しがたまで泣いていたとはつきり推測できる顔だった。鉄之助はあちこち視線をさまよわせたあと、ぎこちなく尋ねた。

「あの、何かあった？ すげー泣いてるみたいに見えるんだけど」

「あ、バレちゃいました？」

シヨウコは照れくさそうに笑う。

「ちよっと仕事で、困ったことがあって。誰も悪くないのに、ごたごたしちやってるんです」

「人間関係か何か？」

「ええと、そうなんです。あたし、小さな工場にいますけど。そこで一緒に働く人たちのことなんです」

そう前置きしてシヨウコはゆっくりと話し出した。

「私のいる工場では、ガラスを作っているんです。敷地は広いけれど、そんな大きな工場じゃなくて、プレハブみたいな所なんですけど。そこにタンクが三つあって、それぞれ稼動していて。その中

の一つのタンクの計器の中に、どうしてもおかしい数値を出すものがあるんです」

鉄之助は腕を組んで首をかしげる。

「おかしい数値？」

「はい」シヨウコはうなずいた。

「タンクの内部の温度を一定に保ってるんです。ガラスを溶かしておくためのタンクだから、少しでも温度が狂うと他の工程で不具合がでる可能性があるから。それはコンピュータ制御で、普通ならまず狂うはずがないの。メンテナンスの時にはそのタンク担当の女の子と、コンピュータのエンジニアが立ち会って、特に問題が無い事を確認してるのに」

「でも、狂うのか」

「そう。メンテナンスは本当なら三ヶ月に一度あればいいの。でも、そのタンクだけ一ヶ月に一度は不具合が出る。そのたびに担当者が上司から怒られて、落ち込んでしまっ……。どうしてだか、本当にわからない。毎日チェックはしてるし、定期的なメンテナンスもしてるのに。そのタンクのメータだけ狂うはずがないんです」

話に時折鼻をすする音が混じる。シヨウコは膝を立てて顔をうずめた。

「機械のことだけならいいの。専門家に修理を依頼してもいいし、ずっと昔のように手動設定に戻してもいい。どうしようもなければ新しく変える方法も、なくはないの。予算はキツイけど……。でも、一番の問題は、それで皆の仲が悪くなってしまうてるの。メンテナンスの人は外注で首をかしげるばかりだし、担当の子は自分を責めてしまっているし、上の人間は不信がっている」

工場のこと。場所のこと。困っていること。たどたどしい説明が終わったところ、シヨウコは顔を上げた。そこで彼女がまた涙を流していることに鉄之助はようやく気づき、慌てて話しかけた。

「なかななるほど。つまり、あんたの工場にあるコンピュータ制御の温度計が壊れてるという話に聞こえるんだが。それさえ直りゃ人間

関係も解決だ。実際を見てみねえとわからねえが、それなら俺が手伝える」

「え？」

「機械つてもんに、少しツテがあつてね。畑違いだから直せるかどうかは別として、原因くらいなら探つてくれるかもしれねえ」

不安そうなショウコをよそに、鉄之助は側においていた上着をこそこそ探つた。ダウンジャケットのポケットに閉まっていたことも幸いしただろうか、折りたたみ式の携帯電話を開くと液晶パネルが発光し、暗闇に小さな光が灯る。有難いことに最新式耐水性の名は伊達じゃあなかったようで、にやつと笑つた鉄之助は短縮ボタンを一押しした。2コール分の間をおいた後、口を開いた。

「あー、もしもし。こちら『ロージイ』」

「ああ」電話口の声はけだるげに答える。「こちら『ジゴロ』。どうした、ロージイ」

「ちよいと頼みがある。仕事じゃねーんだけど、いいよな？」

鉄之助は陽気に話し出した。通話の最中に何度か辺りを見渡して、また話を続ける。さして長くもない電話が終わったあと、そこには静寂が広がっていた。ショウコの姿はどこにもない。

鉄之助はまだ湯氣を立てている魔法瓶の蓋を眺めて、また首をひねつた。喉にひとくちコーヒーを流し込んだ後、震える身体をさする。

「ちくしよー、さみいな・・・」

盛大なくしゃみが一つ、冬空にこだまする。吐いた息は白く尾を引いて、身が切れるほど冷たい空気に吸い込まれていった。

*

*

*

カップルで賑わう雑踏に無機質なコール音が混ざる。街中を彩るイルミネーションを眺めながら、高級ブランドのスーツを着こなした男は隣を歩く女性に目で断り携帯電話を手に取った。女から少し離れた場所へ移動する。

「ああ、こちら『ジゴロ』。どうした、ロージィ」

聞こえてきたのはいつも以上に陽気な男の声だ。荒い息が電話越しからも聞こえる。どうも息が上がっているようだ。ジゴロは思った。何かあったのだろうか。

「ちよいと頼みがある。仕事じゃねーんだけど、いいよな？」

ジゴロと呼ばれた男は携帯電話を持ち替えて頭を掻いた。

「なあ、ロージィ。今日はクリスマスで、今は夜の八時半で、僕はデート中だ。確認するけど、それよりも優先される話なんだな？」

「あたばうよ」電話口から浮かれた声が続く。

「つまんねーこと言ってるなって。詳しい話は穴蔵に戻ってからする。とりあえず、迎えに来てくれ」

「…お前はどこで何をしてるんだ」

「警報が鳴ったんでつい非常口から出ちゃったんだよ」

「財布も持たずにか？」

「いや、状況だけ見てすぐ戻ろうと思ったんだよ。それがちょっとつくしよん！」

「風邪か？」

「海に落ちて、足の感覚がねえ。まだ風邪は引いてないけど、ジゴロが来るまで待ってたら引くだろうな」

「警察の世話になってこい」

「暗くてどこに交番があるのかもわかんねえ。俺がただけ方向音痴か知ってるだろ。時間も時間だし、足は動かねえし、闇雲に動き回るよりは待ってた方がはええと思うんだ」

「ここから近いのか？」

「都内だとさ。埠頭らしい。えーと、コンテナクレーンが幾つも並んでる。ここはすぐ側の公園みてえなところ」

「なるほど、埠頭公園か。たまたま近くにいるよ。知ってるか、豊洲のクリスマスイルミネーション。新観光名所なんだ」

「近いんなら話は早いな」

「俺がこのデートを破棄すればね」

「ぐだぐだ言っでないで来いよ」

ジゴロはわざと電話越しに大きくため息をついた。腕にはめたアルマーニの時計を確認する。

「…まあ、いいだろう。30分くらいで行くよ」

「悪いいな。宜しく頼む。あ、俺、かわいー女の子に助けてもらってたんだぜ」

「は？　じゃあそのコにお金借りてくればいいじゃないか。また会う口実にもなるし」

「あ、それもそうだな。さすがジゴロ。って、あれ？」

「どうした？」

「いや、ちよつと」

電話の向こうで携帯電話を顔から離す気配がした。強い風の音が聞こえる。海沿いは寒いだろうなとジゴロは思った。

「彼女がいなくなってる」再び聞こえてきた声は不思議そうだった。「気味が悪くなつて帰ったんじゃないのか。こんな冬空に水浸しの男はどう考えても不審だ」

携帯電話を通して奇妙な沈黙が流れる。そして情けない声が通話口から響いた。

「こ、コーヒーを。あの、コーヒーを。水筒の。もらったのに」

「うん」

「かわいかったのに」

「つり橋効果ってあるからなあ。ロージィは海に落ちたときどきと、その子へるときどきが混ざってたんだよ」

「いや、違うね。まあ、詳しい話は聞いてるし、絶対にまた会える」

「仕事じゃないんだろ？　なんだよその確信は」

「いいんだよ。ジゴロは面倒くさくなってるんだろ。まーいいや、とりあえず来い」

「面倒じゃないはずないじゃないか。まあ、とりあえず行くよ」

相手が切るのを確かめてからジゴロはそつと電話を切った。イルミネーションを見ながら歩道の脇で待っていた女性のところへ足早に戻る。ウェーブを綺麗に巻いた女性は小走りのジゴロへ愛らしい瞳を向けて笑った。白い肌にはら色の血色が浮かんでいる。

「ごめん。急な仕事で、今すぐ行かなくちゃなくなっちゃった」

ジゴロは困ったように笑ってみせ、女性は残念そうに仕方ないわねと微笑んだ。二人は雑談をしながら豊洲駅まで歩き、その間ジゴロは幾つか芝居がかったセリフも口にしたが、それはこの日に会う女性が彼女で3人目であることを考えれば仕方のないことなのかもしれない。

また会える？　と尋ねた女性にジゴロはやさしい笑顔を向ける。駅のホームで女性を見送った後、ジゴロは時計を見ながら颯爽と歩き出した。

「で、どうということなんだ？」

穏やかな声が鉄之助の機械部屋、通称穴蔵に響いた。窓の無いこの部屋の光源は点上から垂れ下がっている四つの裸電球のみで、今はどれもフル稼働している。それは絡み付く無数のコードを照らし出し、天井に不気味な影を映していた。

埠頭から穴蔵へ戻ってきた二人は、大きな机に向かっていて。一風呂浴びた鉄之助はタオルを肩にかけたまま、頭から湯気をたてている。背もたれつきの椅子に後ろ前に座っている鉄之助に、ジゴロは声をかけながらお茶を差し出した。鉄之助の足には真新しいギプスがはめられていた。

「どうもこうもねえよ。警報が鳴ってな、出たらガントリークレインのてっぺんだよ。ありえねえよ。もー、一步間違えれば100%死んでたっつの」

不服そうに鉄之助はお茶をすする。ショウコと会った一部始終を聞いたジゴロは軽く数度頷き、呆れたように頭を振った。

「本当に大した怪我じゃなくてよかったよ…。普通に死んでもおかしくない高さだ。骨折って、よく岸までたどり着いたもんだ」

鉄之助は感覚の無い足をギプスの上からぺちぺち手で叩きながらのんきに応じる。

「キリンの頭が下がってたのが救いだっただなあ」

「うかつに非常口から出るからだ」

「うかつじゃねえよ。誰が予想できるかってんだ」

それはさておき、とジゴロは無然とした鉄之助を意に介さず話題を変えた。

「で、ショウコだっけ、そのコの相談は、確認するが仕事じゃないんだな？ アラームが鳴ったなら、依頼の可能性もあるんじゃないか」

「それなんだけだよ」

湯飲みを抱えながら鉄之助は目玉だけを上に向けた。

「どっからどう見ても普通の女の子なんだよ。かわいいし。俺達が修理できるのなんて、機械だけじゃねえか。今回は出る場所もおかかったし、誤報じゃねえかな」

ジゴロは楽しそうに笑った。

「ふーん。かわいいし？」

「そう。かわいいし」

鉄之助は大真面目に頷く。ジゴロは鉄之助の肩にかけたタオルを取ると、その頭を荒くひと拭きした。

「よし。じゃあ、どうする。仕事じゃないなら、『ロージイ』じゃなくて鉄之助として動くんだな」

「ああ、そうなる。彼女の話聞くに、ここの工場で間違いないだろ」

裸電球が淡く光る中で、部屋の隅には基盤やシリコンが積まれている。その近くにはむきだしのハードディスク、ドライブなど小さな電子機器が山となって前衛的なフォルムを形作っていた。天井の光源が揺るたび、部屋の隅のレンズや銅線がちらりと反射した。

部屋の中央には巨大な木製の机が設置してある。その下にはメタリックの輝きをもった緑色のボックスが置かれていた。その天板の上には銀色のスイッチがついている。鉄之助が足でそのスイッチを入れると、机上のモニタがぱっと明るくなった。鼻歌を歌いながらキーボードを操作すると、画面上に東京沿岸の立体地図が表示された。軽快なキータッチと連動して地図は一点収束を繰り返していき、最終的に小さな長方形を写して止まった。ジゴロが鉄之助の肩越しにどれどれと覗き込む。

「東京湾沿岸の小さな工場だ。有限会社「R製作所」、従業員数18人。話によると、ここのあるタンクの温度メータの調子がおかしいらしい。タンク内の液体をある一定の温度に保たなくちゃいけないらしいんだが、メータがいつも微妙にずれるんだってよ。で、係

りの女性、それはショウコじゃないらしいけれど、まあその人が見に行くんだが、直しても直しても一ヶ月くらい経つと必ず不具合を起こすらしいんだ」

「おかしい話だね。普通に考えれば」

ジゴロが小さくささやいた。発光する画面を眺めたまま鉄之助はうなずく。

「ジゴロ、可能性としては何があると思う」

「不具合の内容にもよるけど、機械が壊れてるか、手動の設定がおかしいか、その辺じゃないのか。悪質なプログラムが仕掛けられる可能性もくはないけど、可能性としては低いよ。だって嫌がらせなら、何も第三タンクだけに仕掛ける必要なんてない」

そこまで話しジゴロは一旦言葉を切った。考えながらゆっくりと言葉をつないでいく。

「後は、ぱっと思いつくのは金銭関係かなあ。タンクがたびたび壊れることで利益を得る事はなんだろうってね。けどR工場の外部の出入りの状況も分からないし、修理にかかる金の流れも分からないし、従ってそれによって得られるメリットも現段階じゃあ分からない」

「メリットね。誰が、どうしてっていうことになってくるよな」

「そうだな。まあ、状況を確認してからまた考えたらいいんじゃないか」

「ジゴロは楽観的だな」

「やる前からあれこれ考えていられないじゃないか」

事実関係を把握しないまま突っ走るのは鉄之助のよくないところだとジゴロは付け加える。再び流れた穏やかな沈黙を、鉄之助は小さく手を叩いて打ち破った。

「よし。近々工場へ入るセッティングを考えておく。どうにかしてもぐりこんでみるか」

「分かった。鉄之助のお手並みでも拝見するよ」

そこまで言って、ジゴロは片目をつぶってにやりと笑った。ブラ

ンドスーツの襟を見せびらかすように正すのを見て、鉄之助は格好つけめと顔をしかめた。

*

*

*

その日、R工場の朝礼で集まった社員の顔をいつものように順繰りに見渡していた社長は、見覚えの無い二つの顔が並んでいるところで眉をひそめた。

その二人組みは青い作業服を羽織って頭にタオルを巻いている。1人はかなり身長が高く、首から一眼レフをぶら下げた真面目そうな男。もう一人は中肉中背で、周囲ににこにこ愛想を振りまいていた。左足を痛めているのか、かばうような立ち方をしている。

狭い事務室の隅では女性社員同士が彼らにちらちら目を向けながら何かを話していたが、社長が目を向けるとどちらともなく黙りこんだ。社長は不審な二人組みに視線を戻して首を捻った。

「何だね、今日は何かの点検でもあったかね」

聞かれたとたん、鉄之助は普段からは想像もつかない笑顔を見せた。

「あ、いえいえ社長。俺たち、今日雑誌の取材でお邪魔させてもらったんですけど。許可をいただいてありがとうございます。それにしても素敵な仕事場ですねー。俺はライターの屋久島、あ、こっちはカメラマンです」

用意していたのかと思えるほどの、立て板に水の勢いで話し出す。社長を含め全員、疑問を挟む余地すら無い。カメラマンと呼ばれた長身の男は優雅に微笑み一礼し、ようやく勢いに飲まれていた従業員の1人が慌てて口を挟んだ。

「あの、一週間前に取材の申し込みがあったじゃないですか。そのライターとカメラマンですよ」

「ああ、そういえば……。雑誌の名前はほれ、何といったかな……」

言葉を切つて、ライターとカメラマンを自称する二人を振り返る。その視線を受け、鉄之助が発行部数20万部を誇る週刊PC雑誌の名前を挙げた。一度は誰でも耳にしたことがある知名度の高い雑誌だが、もちろん鉄之助が吹いた法螺の一つである。嘘ではないが、実際にはその雑誌が広く手がけるwebコンテンツの中の一つの企画にすぎず、しかも週代わりのミニコラムへ掲載される予定だった。「そうそう、そうだった。コラムの取材の申し入れがあつて、今日一日見学をしたいそうさ。皆、ひとつ宜しく頼む。案内は吉田君が……お休みか、そうだな……じゃあ西君、宜しく」

西君と呼ばれた女性は、先ほど話していた同僚と軽く視線を合わせた後、小さく二人組みに向かって会釈する。紺色の制服がよく似合う女性だ。はにかむように笑った顔が、野に咲く可憐な花を連想させる。ジゴロは鉄之助をちらと見たが、鉄之助は小さく首を横に振った。

二人のやり取りなど気にも留めず、社長は上機嫌でわははと笑いながら二人の後ろから景気よく肩を叩き、質問があればいつでも聞いてくれと告げた。

朝礼の後社長への挨拶をすませると、案内役の西という女性が鉄之助とジゴロに向かって歩み寄った。案外目が丸く、近くで見るとますます可愛いと鉄之助はあさつてなことを考えていたので、西という女性が自己紹介の中で自分の担当が例の第三タンクだと告げたときも、ぼんやりしたまま聞き流しているように見えた。そこでジゴロが軽やかに口を挟んだ。

「なるほど。ご説明ありがとうございます。工場内を回る前に、ライターと僕で簡単な打ち合わせをしても大丈夫ですか？ 何、すぐ済みます」

相手の答えも待たず、鉄之助の首を引っ張り、事務所の隅へと引きずっていく。暴れる鉄之助を、笑顔を浮かべたまま引っぱっていくジゴロを、西嬢はあからさまな愛想笑いを浮かべて見送った。

部屋の隅で資料を確認する振りをしながら、小声でジゴロは釘を刺した。

「何をしにきたのか覚えてるよな？」

「あたぼうよ。西さんが可愛いからって見とれに来たわけじゃない」
鉄之助は不服そうに答える。

「分かっていればいい。鉄之助はさっき首を振ったから、あの子はシヨウコじゃないんだよな？　だいたい、今日の朝礼にいたのか？　そのシヨウコって子」

「ああ、違う。しかも朝礼にもいなかった。そうだ、あとで社長に聞いてみよ」大きくうなずいて、鉄之助は考え込むように首をかしげる。

「えーと、シヨウコの話だと、第三タンクが例の故障タンクだったんで、あの西さんが担当なら具体的な話が聞けるかもしれねえな。当事者だろ」

「故障のせいで担当の女の子と上司の仲が悪くなったらしいじゃないか。今の俺達の案内も、関係がこじれている上司が、部下に面倒な仕事を押し付けたという話になるのかなあ」

「分かん：そんな風には見えなかったが…」

不審な二人組みは揃って腕を組んだ。わずかな沈黙の後、ジゴロが頭を一つ振った。

「まあ、おいおい聞いてけばいいだろう。せつかくの取材だしね」
それにしても、と彼は自分のポケットの沢山ついた作業衣と首に吊ったカメラをしげしげと眺めた。

「こんな服着てるから、俺はてつきり清掃業者かなんかで入ると思っただけだな。こんな正攻法で、さらに鉄之助の本職とかけるとなんてね。しかもあの有名雑誌だ。大風呂敷広げたなあ」

からかうような口調に、鉄之助の声に力がこもった。

「嘘じゃねえよ、広報担当にはしっかり説明済だ。俺はどんな小さな記事だってできるだけの相手のメリットになるプロデューズをするんだよ」

ジゴロはひゅうと軽く口笛を吹く。にやつと口元を吊り上げた。

「昔、手痛い目に会ったからな」

「うるせえよ」

黙らせるように一言放ち、鉄之助はさてと口調を改める。整然とした事務所でこちらの様子を伺いながら待っている西という女性に目をやり、楽しそうに呟いた。ベルトにつないだ皮製のウエストバッグに軽く手を添える。

「状況を理解するための必要な鍵は持つてきた。プログラムさあ、箱を開けたら何がでるかね…」

キュ、キュ、キュ。ぱた、ぱた。リノリウムの床の上、いくつかの足音が重なって摺れた音を立てる。

西歩美は後ろに続く二人組みをちらと確認した。このR工場を取材しにきたという作業服の二人組。彼らと社長とのやり取りが終わった後、何故か自分が工場内の案内をしている。一人が足を痛めているようだったので、ゆっくり歩くように心がけていたが、ちゃんとして来ているようだ。

「この工場は主に一般の消費者の方々からのオーダーメイドのガラス板制作を行っています。その他、場合によっては、各学術機関から実験器具ガラス装置の開発製作を請け負ったりもしますね」

壁沿いの細い通路を歩きながら歩美はゆっくりと説明した。自分が先頭に立ち、その後ろにライターの男、さらに後ろにカメラマンの男が続く。点検用の通路は1人がやっと通れるくらいの幅しかなく、通路からは工場内が一望できる。眼下ではベルトコンベアが縦横無尽に走り回り、いくつかのブロックごとに機械が配されていた。各行程に必要な機械自体はさほど大きくないので広い室内ならばまとめて収まってしまふ。

「まあ、小さなところなので。できるだけ何でもやるようにはしています」

ライターの男はにこにこしながら場内を眺め回している。満面の笑み、だ。

「いやあ、素晴らしいですね！ 大型のね、バルブやパイプが屋外で複雑に組まれている工場もあるじゃあないですか。石油コンビナートや溶鉱炉、原料ヤードとかね。そんな大型設備も捨てがたいですけどね、こういう、こじんまりした機械も愛嬌があっていいですね」

「はあ」

「あの、糸巻きが二つくつついているような機械は何ですか？」

「糸巻き？ あ、ガラス旋盤ですね。あれはちよつと特殊で、ガラスを曲げたりするのに使っんです」

「へえー。コードがいっぱい付いてて、メータやバルブもあつて素敵ですねー。これはもう、芸術品だなあ」

「はあ」

足を引きずっている男は後ろを振り向いて、カメラを携えた男に声をかける。仲が良いのだろう、内容は辛口だけれど口調は親しげだ。

「ちゃんと撮ってるか？ 連れてきてやってんだから、ちゃんと仕事しろよ」

「はいはい、屋久島さん」

やわらかい笑顔で受け流すカメラマン。大人だ。ライターの男よりも年上だろう、朝礼で同僚の女の子は「カメラの人、かつこいい！」と大喜びしていたけれど。

二人のやり取りに苦笑しながら、気になっていた事を聞いてみる。「それにしても、今日はどんな取材でいらしたんですか？ 私は全然聞いてないんです。こんな見学みたいな感じで大丈夫でしょうか？」

ああ、とライターの男はうなずいた。

「十分です。実は世の中には工場つてもんを愛でる人達がいますね、少し前からちよつとしたブームになっているんですね。そこで工場の良さをもっと広めるために、工場をテーマにしたコラムを立ち上げようって企画が通りましてね」

「工場の良さですか」

「実際に働いておられると分かりづらいかと思うんですけどね。鑑賞側としても、そこが、あの一、工場の敷地や機械だとかがですね、届かない世界だからこそ余計に憧れる面があると思うんです」

「はあ」

おかしな仕事もあるものだ。何にせよ、今の自分の仕事は彼らを案内することで、詮索することではない。歩美はお客様用の笑顔を浮かべながら振り返った。足元の通路は下り階段に差し掛かっている。

「ここがガラスの入っているタンクになります。第一から第三までありまして、それぞれ用途がちょっとずつ違います。ええと、ここから下り階段になっているので、足元に気をつけてくださいね」

「あ、はい。これが、第三タンク？」 ライターの男が繰り返す。

「はい。第一から第三までありますね」

前方に並んだ、見上げるほど大きな三つのタンクを示して答えた。タンクの上部には太いパイプが取り付けられ、隣接している1m四方の黒い箱に、制御装置が取り付けられている。

内心、小さくため息をついた。最近この第三タンクは原因不明の不調を繰り返している。必ずその不調に当たってしまうもう一人の担当のことを思い浮かべた。今日はお休みだけれど、あの子は大変だ。社長の軽口を真に受けて、自分のタンクの管理が悪いのかと真剣に悩んでいた。真面目なのだ。

いや、と考え直す。社長も社長だ。あの子が真面目なのは分かっている話だ。冗談とはいえ、気を抜いているんじゃないか、なんて言うより、どういう時にどんなエラーが出るのかとか、もっと具体的な指示を出した方が――

「これが、か」

後でライターの男がぼそつと呟いて、思考を中断。危なげなく階段を下りたライターの男は、後ろから付いてきていたカメラマンに小さく目配せをした。カメラマンは無言でうなずく。妙なやりとり、

「何か、ありました？」

声をかけると、ライターの男はまじまじとこちらを見返した。そのまま数秒経過――あまりにも真剣な顔に後ずさりする。と、ぱし

つと景気のいい音が響いて、ライターの男が頭を抑えてうずくま
た。

「ってーな、ジゴロ！」

ジゴロ？

「気かはやるのは分かるけれど、質問を整理してから人の顔を見な
さい。ほら、お嬢さんが困ってるじゃないか」

後からカメラマンが、ライターの男の頭をどついたようだ。カメ
ラマンはにつこりとこちらに笑いかける。その姿が驚くほどさまに
なっていて、一瞬見とれてしまった。何かおかしい聞き間違いがあ
ったような気もするけれど、ふっとんでしまう。一方、ライターの
男はふてくされたように自分の頭をなで、口の中でぶつぶつ言った。
「いいところ取りってんだよねー、こういうの。そのうち俺は世の女
性たちの味方ですとかうっとおしいこと言いはじめるんだぜ、きっ
と」

「質問はまとまったか？」

カメラマンが相手にせず促すと、ライターの男は大きく息をつい
て立ち上がった。

頭を抑えながら立ち上がった男は愛嬌のある笑顔でこちらに笑いかけた。

「えーと、実は、僕以前知り合いからこちらの工場について伺っていました。何でも、第三タンクの調子があまり良くないらしいですね?」

「あ、いえ…まあ」

驚いた。そんなことは内部の人しか知らないと思っていたのに。

「よくご存知ですね。最近ちょっと調子が悪いんです。誰からそんなこと聞いたんですか?」

「ああ、こちらにお勤めっていう、シヨウコさんという女性の方から伺ったんですけれども」

「? うちの会社の女性社員にはシヨウコという名前のにんげんはいないですけども…」

「あ、じゃあ広報の方から聞いたんだったかな、勘違いしてました」
ライターの方は照れたように笑った。愛嬌のある笑顔だ。

「すみませんね、そうだそうだ、広報の方から聞いたんです。で、どんな風に調子が悪いんですか? 担当の方も困っていらっしゃるって」

「そんなことまでご存知なんですか?」

なんとなく気恥ずかしさを覚える。

「タンクの担当は私と、もう1人、吉田という者がいるんですけれど、どういうわけか吉田の時に限ってメーターがエラーを起こすんですよねって、あ、これ記事になっちゃいます?」

「いやいや、記事にはしませんよ。単なる興味で伺っているだけでいいや、こんな仕事をしてますと、結構機械にも詳しくなりましてね。いい修理屋も知ってますし、もしかしたらお役に立てるかなと。あ、この辺は先ほど社長から許可をいただいているんで、もう、全然信

用していただいて大丈夫ですよ！」

「へえ。すごいですね」

率直な感想だ。ライターの男はいいやと頭を掻いた。そうなんですよとカメラマンが後から身乗り出す。

「この屋久島は、機械にはかなり詳しいんです。本当にどこが悪いかわかると思いますよ。先ほど、吉田さんという方のときに限ってとおっしゃいましたけど、それって不思議な話ですね」

「そうなんです」 思わず相手の顔を見る。本当に不思議な話なのだ。

「相性が悪いのかしらねーなんて言ってたんですけどね。私の時は全然問題ないんです。あの子のときだけ、温度が異常だっていうエラーが鳴るんですけど、実際には何の問題もないんですよ」

「実際には何の問題もない」 ライターの男は繰り返した。

「ええ。どうもエラーメッセージだけが出るみたいなんです。でも、ちゃんと点検しないわけにいかないでしょう？ 私と吉田は決まった曜日で交代しているわけではないので、本当に不思議なんですよね。その度にメンテナンスの方を呼ぶんですけど、結局原因がわからなくて、おかしいねえっていうことになるらしくて」

「なるほど……」

ライターの男は腕を組んだ。革のウェストバックに手を入れながら真剣に考え込んでいる。大きめのバックの中には何が入っているのか、かちやかちやとプラスチックがぶつかり合うような音が鳴っていた。彼は再びこちらを向くと、何でもないことのようにそういえば、と尋ねた。

「あなたは、その不具合ってのを見たことがあるんで？」

「ええ、何度か、その子と一緒に」

「そうですか。で、メンテナンスの方を呼んで、修理して、と。この黒い箱が制御システムですか？」

「あ、そうなりますね。でもこちらにあるのは端末で、基本的な操作は工場内の全てのシステムをチェックできるセンタールームで管

理してます」

「そのメンテナンスの業者さん、こう、何て言うんですか、不具合を直すたび追加料金みたいのをお払いしてらっしゃったり？」

どうだったろうか。少し考えて口を開く。

「いや、そういうことはないですね。むしろ手間ばかり増えていると思うんですけど。偽のエラーが出た時は、吉田とメンテナンス担当の方がセンタールームとこっちを駆けずり回るんですよ」

後ろでカメラマンが首をかしげ、視線を宙へ向ける。ライターの男は笑って言った。

「じゃあ、皆さんが大変になっちゃいますねー」

「そうなんですよー」　こちらも大げさにため息をついてみせる。

あの子が来ていればもつと詳しい話が聞けたのに、と思ったところで、今朝の社長の言葉を思い出した。そうだ、社長はまず「吉田くん」と呼んだのだ。取材だというのに、何の準備もしないはずがない。最初はあの子に話を通っていたのだろう。

となると、あの子が急に休んだ理由も察しがついた。取材の日に万が一にでもタンクのエラーが出たらと思ったに違いない。律儀な子だ。

「本当、困ってますねー」　しみじみと言うと、カメラマンの方が同情した顔を向けてくれた。ライターの男はそれじゃ、と目を輝かせる。

「この箱を、ちょいと調べさせてもらいますね！　あ、社長から許可もらってるんで！」

「え、え、ちよつと……」

止める間もなく、彼はウェストバッグからねじ回しを取り出して装置のカバーを外しにかかった。外カバーが取り除かれ、内部天板が取り除かれ、次から次へと部品が解体されていく。

あつという間に作業を終えると、装置の中に、緑色の板に細かいコードが沢山付いた機械が現れた。それをライターの男はざっと点検し、ウェストバッグから金属の箱を取り出す。銀色に輝く長方形

のそれは、天板の一部が液晶パネルになっていて、立膝で床に屈みこんだライターの男はその機械の液晶部分を上にして箱を床に置き、ウエストバッグから赤と青の細いコードを取り出して装置とつなげた。

ライターの男が銀色の箱に付いているスイッチを入れ、いくつかのボタン操作すると、天板の液晶部分に次々と文字列が流れ始めた。

目の前で繰り広げられる鮮やかな手際を、歩美はぽかんと眺めていた。

しばらくの間、ライターの男は真剣な表情で液晶画面を見つめていたが、突然、あ、と声を上げる。歩美ははっと我にかえた。ライターの男は先ほどとはうって変わって、愛想笑いと書いた紙を切つて顔に貼り付けたような笑顔を浮かべていた。目だけが笑っていない。

「あれ？　そういえば、一番最近、エラーが出た日って、二ヶ月前の、えーと13日の夕方くらいでしたっけ？」

「あ、確かそうでした。13日の金曜日だったんで覚えてます。やっぱり吉田が慌てて対応してーって、それも広報から聞いたんですか？」

ライターの男は質問には答えず、歩美の目を覗き込みながら、さらに口を開く。

「もしかして、今月の25日って、吉田さんいらしてます？」

「ええと……」　問い詰められる感覚を抱きながら歩美は記憶を探ってみたが、いくら小さな会社のこととはいえ、他人の数週間先の予定までは入っていない。

「ちよつと、事務所に戻って確認してみますね」

歩美は言い置いて、足早に事務所へと向かった。

後にはライターの男、屋久島鉄之助と、カメラマンことジゴロが残される。

鉄之助は手元の micro マザーボードを搭載した特製の小型パソコンを見ながらにやりと笑った。これ一台でハイエンドタワー型 PC に匹敵する性能だ。暗い液晶画面の上に、システムのコードが目まぐるしい勢いで流れていく。側面についているキーボードを操作し、赤いマーカーを引かれている数ラインを表示させて止めた。

「ビンゴ、ってやつすねー」

鉄之助が画面を見ながらぼそりと呟いた。ロージィは肩越しに小さな画面を覗き込む。

「俺には分からないけど、ビンゴなのか、それ」

「ああ。これは接続先のベースのシステムを読み取って、その意図からはずれた——つまり不必要なコードを示すプログラムだ。タンクの制御装置にや本来の機能の他に、簡単なプログラムが仕掛けられてる。時間を指定して親機であるセンタールームヘエラーメッセージの画面を呼び出すプログラムだ。センタールームの方かとも思ってたけど、警備の薄いこっちのが仕掛けやすいもんな」

「ふうん。実際にエラーが出たってわけじゃあなくて、その画面だけってことか」

ジゴロは興味深げに相槌を打った。それにしても、と鉄之助は口を尖らせる。

「穴蔵で話した、ジゴロの一番最初の予想が当たっちゃうんだもんな。本当、勘だけはいいいよな。まーこんなちやちなプログラム、悪質とはいえねーけど。メンテナンスの奴が気づかない方がおかしい。怠慢じゃねえの」

「怠慢、ねえ」

含みのあるジゴロの口調。鉄之助は軽く相棒を睨んで立ち上がった。

「なんだよ。言いたいことがあんならはっきり言えつつの」

「怠慢、ねえ」

「そこをはっきり言っただけいいんじゃないよ！　なんだよイラッとするなあ！」

「鉄之助はどう思う。これ、嫌がらせの類かな」

「そうなんじゃねえの」

鉄之助はつつけんどんに返す。

「それ以外にねえだろ。メンテ側には一銭の得にもならねえし。そう簡単に外部の人間は入れないだろうから……そうだな、担当の吉田って子か、メンテナンスの野郎に恨みでもある従業員の奴が仕掛けたんじゃないのか」

「ふうん。俺なら、完成されてるシステムに別のプログラムを組み込む技術があれば、どちらかといえばSEなんか目指すけどね。まあ、俺は詳しいことは分からないし、そのくらいできる人がここにいるのかもしれないけど」

鉄之助は少し考え込んだ。幾度かつまずで床を叩く。とんとんという音にのせて、鉄之助はどうかなと呟いた。

「確かに素人にやあ難しいだろうよ。でも、ここは工場だ。しかも機械制御システムを導入している。だとしたら、それくらいできる奴がいてもおかしくねえし、逆に言えばできる奴が犯人じゃねえか」

ひと息で鉄之助は言い切った。伸びをしながら、制御装置の端末に目を向ける。最後に軽い調子で付けたした。

「にしても、こんな簡単なプログラム、メンテナンス側が気づかねえとな」

大きく伸びをしている鉄之助の後ろで、ジゴロはにやりと笑った。ゆっくりと言葉をつむぐ。

「なんで気づかなかったんだろうね」

ああ？ と鉄之助は振り返った。丁度いいタイミングで、場内のどこかで什器ががしゃんと音を立てた。

「なんでって。そりゃ、単に腕が悪いだけだろ」

「勿論その可能性もある」

ジゴロはうなずいた。

「可能性だけで言えば、それこそ社員の誰でもが犯人で在りうるし、メンテの人だってそうだ。ただ、その可能性に優先順位をつけるこ

ともできる。いくらなんでも、何回も何回もエラーメッセージが出ながら、その原因が究明できないなんておかしい。ましてや、それが簡単なプログラムだっていうなら、なおさらだ。職務を怠慢する奴なのかもしれないが、そんな奴が職員と協力して、この広い工場内を汗かきながらあっちこっち走り回ったりするだろうか？」

鉄之助は頭をかきむしった。深く息を吸い込み、思い切り吐き出す。同じ動作を2、3度繰り返してから、口元を引きつらせた。ジゴロはそれを面白そうに眺めている。

「だ・か・ら・さ。言いたいことがあんなら、はっきり言え」

「僕にはなんでお前が分からないのか理解できないよ」

ジゴロは苦笑いを浮かべた。鉄之助はまだ額の皺を緩めない。機械に囲まれた場内の片隅で、ジゴロは両手を広げ、わざとらしく片目を瞑ってみせた。

「古今東西、神も人間も全霊を賭けてきたことじゃあないか」

4 (後書き)

「それじゃ、来週の25日にまた来ます。あなたと、吉田さんと、あと社長もいたほうがいいかな。俺とジゴロ——こいつも行きますんで」

戻ってきた西歩美から必要なことを聞きだした直後、鉄之助からてきばきと指示が飛んだ。

西歩美は口をあけたまま、こくりと頷く。ジゴロがひゅうと口笛を吹いた。鉄之助は床に散らかった工具を片付けながら付け足す。

「あー、そうだな…、いくつかお願いしたいこともあるんで、社長には俺から伝えます。たぶんその方が話が早いし、うまくまとまると思う」

「舌先三寸だものな」 ジゴロがまぜつかえず。鉄之助はジゴロを見ようとせずに答えた。

「この件に関しては本当のことしか言わねえよ。舌先三寸はテーマだろうが、たらしが」

「ずいぶんな言われようだなあ」

「あ、あの」

顔中に疑問符を浮かべながら成り行きを見守っていた歩美は、ようやく口を挟んだ。

「え、えつと、いったい、どういうことなんです？ あの、エラーの原因がお分かりになったんですか？ それとも取材の関係で何か？」

「原因のほうです」鉄之助はそっけなく言った。

「それから、メンテナンスの人にも連絡して集まってもらってください。もしですよ、もし、その日に例の誤作動が起これたら大変なんです。いいですね？」

「は、はい」わけがわからないといった表情で歩美が頷く。

工具を一通り片付けた鉄之助は、綺麗に解体されたタンクの制御

装置を元通りに組み立て始めた。一度しまった工具の中から、プラスチックライバー1本を取り出し作業を開始した。

しばらくかちやかちやと金属がぶつかる音が続く中、思い出したように鉄之助の口が動いた。

「そうだ、これがいつとう大事なんですが」

「は、はい…なんでしようか」

外側を覆うカバーを付け終わったところで、鉄之助は顔をあげた。歩美の目をまっすぐに見つめる。今まで以上に強いまなざしに、歩美はぐくりとつばを飲み込んだ。

「ショウコ、という名前に、心当たりはありませんか？ 髪の毛長い女性で、年齢は10代後半〜20代くらい。髪は茶色でふわふわした感じで、中肉中背、目は大きめで、結構かわいいんです。こちらの関係者の方のはずなんですが」

「いえ…、それは、私には、残念ですけど…」

歩美の言葉に、鉄之助はあからさまにがっかりした様子をみせた。その後ろで、ジゴロは近くに備え付けられている三つの巨大なタンクの一つに近寄る。タンクの側面に軽く手を当て、口の端を持ち上げた。

工場内から事務所へいったん移動した後、鉄之助とジゴロは戻ってきた社長としばらく話し込んでいた。肩を落として去っていくライターと、それを慰めているカメラマン。取材に来た奇妙な二人連れを見送った後、歩美はやれやれと息をついた。隣に立つ社長を見上げる。

「ショウコっていう女の人、ご存知です？ あのライターの方から関係者じゃないかと聞かれたんですけど、あたし分からなくて」

社長はああ、と首をかしげて頷いた。

「つい先ほど、私も聞かれた。知らないと言ったら、残念そうではあったが、それ以上の追求はしなかったな。私はその女が何か関係しているのかと聞いたんだが、どうもそうでもないらしい」

「なんだか、よく分からないです。25日に人を集めるだとか、まるであのエラーが、25日に起こるとも言いたいみたい」ぽつりと歩美は呟いて、あわてて口を押さえた。

「いえ、何でもありません。起こらないに越したことはないと思うんですが」

「正直なところ、私もよく分からないんだ。ただ、取材を受けるにあたって別の筋から、彼を推されてはいるんだ。だから、それなりに信用していいんだろう。彼からタンクの誤作動のしくみについては詳しく教えてもらった。あれはなんだ、手入れでどうにかなるもんじゃないんだ。吉田には悪いことをしてしまったと思うよ」社長は独り言を言うように告げた。妙にさばさばした口調だった。「とりあえず、25日を待つか」

その隣で、歩美は小さくため息をついた。

* * * *

ステップを登る軽快な音。崩れ落ちそうに風化した建物の、壁面に沿った長い階段の最後の一段で、ナイキのスニーカーが軽やかに跳ねた。

闇の中で金属が数度触れ合う。しばらくして、ぎいという鈍い音とともに、壁面のライトがいつせいに階段を照らし出した。

「おい、いいぞ！」

ドアから頭だけをのぞかせた鉄之助は、地上から見上げているジゴロに小さく叫んだ。ジゴロは手を上げてこたえ、規則正しい音を鳴らしながら階段を上る。身をかがめて部屋のドアをくぐった。

がらんとした室内の半分を、大きなスチール製の机と椅子が埋めている。その真上で白熱電球が鈍い光をはなち、天井と一体化した空調用のダクトがかすかな音を立てていた。鉄之助は腰に着けてい

たウェストバッグを玄関の隅に放り投げると、小型の冷蔵庫にとびついた。酒の入ったボトルを数本取り出しながら面倒くせえなあとかく。

「一度怪我したくれえで、いちいち電気つけさすんじゃないよ。電気代だって無料じゃねえんだ」

「君子危うきに、ってね」ジゴロはすました顔で答えた。

「必要なら電気代くらいいくらでも払うさ」

「いらねえ」

エビスビール、ハイネケン、バドワイザー……。机上に次々と缶が並べられていく。鉄之助はもう一度冷蔵庫をのぞきこんで、これだけかと舌打ちをした後、無言で八海山のボトルを取りだした。そのほか、料理の入ったいくつかの小皿を中心に置く。

鉄之助はビール、ジゴロは日本酒をそれぞれ自分のグラスに注いだあと、乾杯もせず飲み始めた。小皿をつまみながらも既にグラスの中身を半分に減らしたジゴロが鉄之助を見た。

「どうするんだ、今回の采配は」

「どうって……」

鉄之助は少し黙り込んだ。情報を頭の中で一巡させる。小さなガラス工場。ガラスタンクの炉。異常のないエラーメッセージ。社長にタンクの担当二人にメンテナンスの男、そして事の発端となった泣き顔の女、まっすぐに自分を見つめるその潤んだ瞳。苦い海水の味と海風の寒さを思い出し、鉄之助は身震いした。

「どうしようもないだろ。そのままだ」

「ほっ」

「俺は采配なんて知ったこっちゃねえ。んなもんは俺の範疇じゃねえ。けりつける奴あ自分でつけるし、できねえ奴は周りが黙っちゃねーよ」

「うん」

「だいたいお前がかまなきや、俺はエラーの原因をあの社長に伝え

るだけで済んだんだ。このエラーはこれが原因でした、このプログラムを抜き取ればもう大丈夫ですよって、それだけだ。簡単なものだ」

鉄之助はまた一杯、ビールをあおる。空いたグラスの空間を埋めるように、すぐにハイネケンをつぎ足した。それも一気に半分ほどを胃の中に流し込む。同じようなペースでグラスを空けながら、その様子をジゴロは面白そうに眺めていた。しばらくの間、どちらも無言で酒をあおり続ける。

白熱灯に照らされたオレンジ色の室内で、空になった缶がテーブルの隅に影を作った。部屋にはテレビもラジオもない。ダクトのうなる音が静かに部屋を満たして、隅に飾られた小さな観葉植物が所在なげに揺れた。息を吸い込むとむせそうになって、空気が乾燥していると鉄之助は思った。薄暗い天井で、ダクトの稼働を示す青いランプが星のようにまたたいている。

冷たいビールが喉に心地よくしみる。鉄之助はそうだなと一言呟いた。

「俺には実感として湧くものはない。だが、そいつがなぜ、そんなことをしたのか、分かるような気はするんだよ。そこには何か、あたたかいものがあるんだろう」

ジゴロはおや、という顔をした。顔色一つ変えず、グラスの日本酒を飲み干す。

「らしくないな。そんな曖昧なことを。0か1かで判断するんじゃないのか」

「理解はできるつつてんだ。お前みてーな、何事にも熱くなんねーで、いつつも知ったふうな顔で、いろんなことをひよいひよいこなしていく奴にはわかんねーだろうけどよ」

「昼間のことといい、言ってくれるなあ。言われるまで分からなかったくせに」ジゴロはボトルから手酌で酒を注ぐ。グラスに軽く口をつけ、唇を湿らせた。

「僕はスマートにこなしているだけだ。何の問題もない。女性を口

説くにしろなんにしろ、物事にはなんだって、一番うまいやり方
てがある」

「んなこたわかってる。はたから見たらぶざまなやり方だろうよ。
お前みたいな格好つけに比べたらなおさらだ」

ジゴロはわずかに片眉を持ち上げてみせたが、鉄之助はかまわず
に口を開く。それつの回らない言葉が飛び出した。

「でもさ、分かるような気はするんだ。そこまでするくらい、なん
かもう、ずっと夢を見るみたいにさあ、うっとおしいくらいに、ど
こにもいない理想の人を考えるようなさ、そんなことが……」

一旦言葉を切り、鉄之助は視線を落とした。焦点の合わない目で
黄金色の液体が注がれたグラスを眺め、グラスに手を添える。そし
て自嘲でもするように口元をゆがませて、どうかなとつぶやいた。
「本当は、分からねえのかもしれないねえけど。俺には、そんなことは
何も」

はつきりしない言葉を口の中でつぶやく鉄之助を少し驚いたよう
に眺めたあと、ジゴロはにっこりと笑った。

「大丈夫」

鉄之助はビールに口つけたまま、ぼんやりと目の前の相手を見つ
める。ジゴロはとろけそうな笑顔を鉄之助に向けたまま、言葉を続
けた。

「鉄之助、今、かなりぶざまだから」

「てめえ……」

「褒めてるんじゃないか。いやー、若いっていいねえ。まあ人間な
んでどこかいびつな方が——」

グラスを放り出した鉄之助がジゴロに掴みかかるうとしたとき、
ジゴロのポケットから最新の流行曲が流れ出した。ジゴロは落ち着
いたしぐさで振動している携帯電話を取り出し、通話ボタンを押し
た。

「はい。ああ、君か。どうしたの？ いや、僕は特に、何も。ちょ
っと、知り合いと飲んでたけど。今から？ うん、分かった。はは

っ、行くよ。ああ、じゃ」

長い指が静かに電話を切った。ジゴロは満面の笑みを浮かべて、
憮然としている鉄之助を振り返った。片手で携帯電話を操作しながら、もう一方の手を挙げる。

「じゃ、今から、ちよつと出てくるから！ 今日の話はまた今度な」
「援交ばつかすんなよ」鉄之助は椅子に座りなおしてため息をついた。

「なんてことを。ユキちゃんは成人してるから」

「そういうことを言ってんじゃねえ。何人かけもってんだ」

「僕にはかけもちつていう概念はないね。みんな大事」

「どこの常套句だよそりゃ」

「鉄之助には例の、えーとなんとかちゃんがいるじゃないか」ジゴロはにやにやと口をゆがめる。その楽しくて仕方がないという様子が、鉄之助の最後の忍耐を切り捨てていく。

「シヨウコだ！ 見つからねえの知ってて茶化すんじゃねえ！ お前はさっさと行ってこい」

部屋のドアが閉まる音を背中であきながら、鉄之助はゆっくりと息を吐いた。テーブルに広げた皿をどかしてから、音もなく椅子から降りる。床に放り出していたかばんを漁り、昼間大活躍したmicro-ATXを机上に置いた。そして面倒くさそうな顔で頬づえをつきながら側面のボタンを押していく。小さな箱が起動し、昼間に吸い出したプログラムが液晶画面を流れはじめた。

ちかちか光るディスプレイに羅列するコード。次々に現れては消えていく文字列のある一点で、鉄之助は突然画面を止めた。逆スクロールを繰り返し、浮かび上がる英数字を何度も眺め直す。吸い出したプログラムをテキスト表示させ、隙間なく埋め込まれた文字列を命令ごとに、根気よく腑分けしていく。何かを考えるように、机を軽く叩く音が不規則に響き続けた。

長い間、鉄之助は画面を凝視していた。しばらくしてポケットか

ら携帯電話を取り出すと、ぶつぶつつぶやきながら、数字を押していく。やがてコール音が聞こえはじめた。

「ああ、どうも。夜分にすみません。ええ、あの、25日より前に、もう一度伺う必要ができました。そのとき、もし、今日お話を伺ったような外部のメンテナンスの人以外で、工場内でシステムを担当する人なんかいたら、ご挨拶させていただきます。エラーコードの画面について、ちょっと伺いたいことがあるもんですから。はい、マニュアルとか知ってる人ですね。それから、25日の場所なんですけど…」

5（後書き）

鉄之助が最後のほうでぶつぶつ言っているのは、これから寝る時間ねえぞちくしょうとかそんなんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7435d/>

ロージとジゴロの機械屋事件簿

2010年10月28日04時23分発行